印度學佛教學研究第41巻第2號　平成5年3月

Kumārila の śabdārtha 論
——abhidheya と gamya——

小　川　英　世

0. Kumārila は，〈表示関係〉(vācyavācakabhāva) の認識の方法に関して，〈表示関係〉は，1) anvaya と vyatireka によって認識される (TV, aveṣṭyadhikaraṇa [JS2.3.3]: sarvathā*nvayavyatirekābhyāṁ* vācyavācakasambandho vijñāyate) と述べ，またその一方で，2) 年長者の言語活動から anyathānupapatti——X なくしてYは説明不能であるということに基づくX想定 (kalpanā) の原理——に基づいて理解される (TV, kartradhikaraṇa [JS3.4.12-13]: *anyathānupapattyā* hi vyavahārāt sa gamyate) とも述べている。これら両見解は，二者択一的なものではなく，Mīmāṁsānyāyaprakāśa [ākhyātārthanirūpaṇa] に，「〈表示関係〉は，anvaya と vyatireka によって，nyāya (原理) と連携して理解される (nyāyasahitānvayavyatirekagamya)」と述べられているように，相補的なものである。この場合の nyāya とは，ananyalabhya-śabdārtha-nyāya であり，これは anyathānupapatti による〈表示関係〉の理解に関わる原理である。単なる anvaya と vyatireka によってではなく，anyathānupapatti と連携した両者によって〈表示関係〉は理解されるのである。anvaya と vyatireka の anyathānupapatti との連携が，何故この関係の理解に言われねばならないのか，その理由を探るのが本稿の目的である。

1. anvaya と vyatireka による〈表示関係〉の認識に関しては，ŚV, sambandhākṣepavāda, kk. 24cd-32cd に次のようなことが言われている。

1) 単一の śabda (言語項目)，例えば〈go〉という語から，多数の普遍 (jāti)・多数の属性 (guṇa)・実体 (dravya)・多様な行為 (karman) を捉えている知が，同時に生起する。

2) この場合には，この語の vācakatā は，これらの要素がない混ざった混成体 (saṅkīrṇārtha) を対象としてすでに成立している。

3) anvaya と vyatireka によって，その混成体から抽象された要素 (niṣkṛṣṭa-artha) に，この vācakatā は制限される (niyamyate)。

4) 混成体は，śrauta な要素と，lākṣaṇika (=gamyamāna) な要素とから成る

(śrautalākṣaṇikātmaka). śrauta とは，śabda によって表示されるところのもの (śabdena ucyate) であり，lākṣaṇika とは，〈表示対象〉(abhidheya) との関係に基づいて知られるところのもの (nityasambandhād abhidheyena lakṣyate) である。

5) śabda が発声された時に生ずるその混成体の認識だけから活動(vyavahāra) が成り立つ世間的なレヴェルでは，混成体の要素に関して śrauta・lākṣaṇika の弁別 (viveka) はなされない。

6) 聖典解釈学 (śāstra) の領域では，祭式規定文に関して〈力関係〉等を確立するために (balābalādysiddhyartham)，混成体の要素は śrauta と lākṣaṇika に弁別される。この点について Kumārila は次のように述べている.。なぜなら，普遍 (sāmānya) を表示する語が，lakṣaṇā の力によって，［普遍の］ヒエラルキーを構成する (kakṣāntarita) 下位の普遍 (sāmānyaviśeṣa) を指示して生起する時，その語は［śruti (直接的表示機能) によって自己本来の意味を指示する語より］弱力である.」

7) 牛とその特殊である śābaleya 牛・bāhuleya 牛という構制で――この構制で牛性 (gotva) という普遍に対し śābaleya 牛性は下位の普遍である――，〈go〉という語は牛に対して使用され，それの特殊 śābaleya 牛が存在しない場合でも，他の特殊 bāhuleya 牛には使用される。一方，馬には牛性にとっての上位の普遍 (parasāmānya) である存在性 (sattā)，実体性などが存するが，当該の普遍牛性は存しないことから，馬に〈go〉という語は使用されない. このような場合，混成体から抽象された要素牛性と〈go〉という語の使用 (prayoga) に関して，「牛性 (gotva) が在るに時は，〈go〉という語［の使用が］ある］」という肯定的共在関係 (anvaya) が知られ，「牛性が不在の時には，〈go〉という語［の使用は］ない」という否定的共在関係 (vyatireka) が知られる。以上の anvaya と vyatireka から理解されるのは，「〈go〉という語は，［個物］牛と不可離の関係にある牛性だけ (gotvamātra) を表示する (vācaka)」ということである。

8) それゆえ，śabda には，先ずもって最初に不特定の gamakatā＝gamya-gamakabhāva が認識され，この gamakatā に基づいて，後にその śabda に abhidhāyakatā＝abhidheyābhidhāyakabhāva が認識される。Kāśikā はこの点についで次のような説明を与えている。「『この［śabda］は，この artha の gamaka である』(asyārthasyāyaṁ gamakaḥ) と知られた時，vyāpāra (〈ハタ

ラキ〉〉のないもの (avyāpriyamāṇa) が理解 (avagati) に対する原因 (kāraṇa) であるということは妥当しないから，それ [śabda] に vyāpāra のあることが決定される。そして〈表示機能〉(śabdavyāpāra) が〈abhidhā〉(〈表示作用〉) と呼ばれる。したがってこの場合，abhidhānakriyā (〈表示作用〉) との関係から，まさに gamakatva の特殊形 (viśeṣa) である abhidhāyakatā が śabda に知られる。」

9) anvaya と vyatireka (=avinābhāvitā) は，この不特定の gamakatā= gamyagamakabhāva という関係の制限者 (sambandhaniyama) である。関係の制限は，関係項である gamya と gamaka の両面において可能であるが，当該の制限は，gamya の特定化によるものである。

2. anyathānupapatti に基づく〈表示関係〉認識に関しては，ananyalabhya-śabdārtha-nyāya の典型的な適用が見られる Kartradhikaraṇa を取り上げよう。

1) いかなる場合にも (sarvatraiva) 単一の śabda が発声された時，その śabda から複数 (aneka) の artha が理解される (gamyate)。

2) しかしながら，理解される限りのすべての [gamya-] artha が〈表示対象〉(abhidheya) である訳ではない。

3) 〈表示能力〉(vācakaśakti, abhidhānaśakti) あるいは〈表示機能〉——それらは不可見 (adṛṣṭa) ——は，それなくして特定の artha の認識 (pratīti) とその artha に対する śabda の使用 (prayoga) が妥当しないであろう場合に，想定される。すなわちそれらは，因果関係 (tadbhāvabhāvitva) がそれなくしては説明不能であるということ (anyathānupapatti) に依拠して，想定 (kalpanā) される。śabda にそれに対する〈表示能力〉が想定される [gamya-] artha が〈表示対象〉である。

4) {pacati} という定動詞形が発声された時，bhāvanā・「dhātu」の意味・〈行為主体〉・〈行為主体〉の〈数〉・特定の人称 (puruṣa)・特定の upagraha (行為の方向性)・特定の時間といった artha が理解される。

5) これらの [gamya-] artha のうち，何が śabda から理解されるもの (śābda) で，何が [gamya-] artha から (arthāt) 理解されるもの (ārtha) か，その区分 (vibhāga) を世間人は知らない。この世間的には知られないところの区分を知る手段 (NS: lokād ajñātasya vivekasya jñānopāyaḥ) は，「[複数の gamya-artha のうち，gamya-] artha から理解されないものが śabdārtha で

ある」(yo arthān na gamyate sa śabdārthaḥ)＝「śabda から理解される［複数の gamya-artha のうち，］まさにある限りのものは，「śabda］以外［の gamya-artha］からは獲得されないものである。この場合，それらはすべて śabdārtha である」(TV, bhāvārthādhikaraṇa: yāvān eva hy ananyalabhyo'rthaḥ śabdād gamyate sa sarvaḥ śabdārthaḥ) という śabdārtha＝abhidheya 定立の原則に立脚することである。世間では，śabda 以外の項目から確立されるもの，それを〈表示対象〉とは認めない (loko yad anyataḥ siddhaṃ nābhidheyaṁ tad icchati).

6) {pacati} の場合，それから理解される一群の［gamya-］artha のうち，bhāvanā については，{pacati} という śabda 以外にそれを認識せしめるもの (śabdavyatirikta-pratyāyaka) があるのを経験しない (na paśyāmaḥ)。因に，Bhāvārthādhikaraṇa においては，定動詞形が bhāvanā を表示することは，anvaya と vyatireka に基づいて確立される (ākhyātasya cānvayavyatirekābhyāṁ tatparatvam) と述べられている。

7) 定動詞形においては，〈行為主体〉は，〈表示対象〉であるとはみなされない。定動詞形から〈行為主体〉は，〈表示関係〉以外の関係 (saṁyogāntara) に基づいて理解される。単一の śabda から理解される一群の［gamya-］artha の間の gamyagamakabhāva は，〈非逸脱〉(avyabhicāra) の関係に基づく。bhāvanā は，〈行為主体〉を逸脱しない。すなわち，〈行為主体〉がなければそれは存立しない。よって，arthāpatti あるいは anumāna に基づき，〈行為主体〉は，bhāvanā から理解される (anyataḥ siddhaḥ)。したがってそれは，〈表示能力〉想定の因とはならない (siddhyati cāsau［=kartā］bhāvanāta iti nābhidhānaśaktikalpanāhetur bhavati).

8) arthāpatti によって〈表示能力〉が想定される。そして arthāpatti は，anyathānupapatti を本質とするものであるから，この場合それは śabda 以外の項目からは獲得されない対象 (ananyalabhyaviṣaya) の領域で機能する。単数性は，śabda 以外の項目からは獲得されない (nānyato labhyate)。もし獲得されるとすれば，〈表示対象〉ではないもの (anabhidheya) と想定される (...ekatvaṁ tāvan nānyato labhyate yenānabhidheyaṁ kalpyeta).

3. 以上のことから次のようなことが言える．Kumārila は，単一の śabda から複数の artha——普遍と特殊のヒエラルキーを構成するものであろうとなかろうと，artha 間には〈非逸脱〉の関係が成立する——が理解される (gamyate)

ということを言語活動の実態として捉えている [1-1, 2-1]. 単一の śabda が発声された時に理解される一群の artha は，その śabda の発声を契機として理解されるもの (gamya) であるという点では区別されない。しかし，だからといってその一群の artha すべてが，その śabda から直接理解されるもの (abhidheya, śrauta) である訳ではない [1-4, 2-2]。一方 śabda には，発声を契機として一群の artha を理解せしめるという点で，gamakatā＝vācakatā がすでに存在している。しかし śabda が聞かれた段階で，この gamakatā がその一群の artha のうちのどの artha に相関したものか特定されることはない [1-2]。この śabda の不特定な gamakatā は，それに相関した gamyatā の担い手を特定することによって限定される。その特定の手段が，一群の artha から抽象された artha とその śabda の使用 (prayoga) に関する anvaya と vyatireka である [1-, 7;2-6]。anvayaと vyatireka によって，その śabda の gamakatā は，特定の artha だけに相関したものであることが理解されるのである。

ところで，gamyagamakabhāva は，理解 (avagati) をめぐる因果関係である。śabda は，自己に固有な artha の理解をもたらす原因 (kāraṇa) である。そして因果関係は，śakti を想定せずしてはその説明がつかない [2-3]。しかし，ananyalabhya-śabdārtha-nyāya により，それに対する〈表示能力（機能）〉を想定せしめる arthāpatti＝anyathānupapatti が適用できる対象は，śabda 以外の項目によっては獲得されない対象 (ananyalabhyaviṣaya) に限定される [2-8]。そして一群の artha のうち，何が śabda から理解されるもので何がそうでないか，それは anvaya と vyatireka による gamyagamakabhāva の制限 (gotvam eva śabdagamyam nānyat) によって知られる [1-7]。ここに確定された ananyalabhyaviṣaya に関して anyathānupapatti に基づきそれに対する〈表示能力（機能）〉が想定されることになり，その śabda は abhidhāyaka として把握され，その ananyalabhyaviṣaya は，それに相関して，abhidheya として把握される [1-8]。

このように Kumārila においては，anvaya と vyatireka に基づく śabdārthasambandha としての不特定な gamyagamakabhāva の制限により，anyathānupapatti による〈表示能力（機能）〉想定の適用対象が提供され，この想定を通じて śabdārthasambandha が，gamyagamakabhāva の特殊形としての〈表示関係〉として把握されることになるのである。ここに anvaya と vyatireka の anyathānupapatti との相補性は明らかである。

〈キーワード〉 Kumārila, vācyavācakabhāva, anvayavyatireka, anyathānupapatti
（広島大学講師）